

ミステリ読書案内

2024. 5. 18 発行元

第575号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

一色さゆい「ダ・ヴィンチの遺骨」

第572号で『ルーヴル美術館の天才修復士』を取り上げたばかりなのだが、3月に出た続編『ダ・ヴィンチの遺骨』がこれまた面白かったので、連続して紹介することになった。歴史的な美術ミステリの世界。

「コンサバター・シリーズ」

幻冬舎文庫から書下ろしで出ている『コンサバター・シリーズ』。『ダ・ヴィンチの遺骨』で五冊目になる。探偵役の天才修復士・スギモトと彼に協力する若手修復士・晴香が物語の視点になっている。

シリーズの最初の頃は短編形式の小さい事件が多かったのだが、シリーズが進むにつれて美術史上の大きな謎に挑む内容に変化してきた。前作『ルーヴル美術館の天才修復士』も充実した出来だったが、本作『ダ・ヴィンチの遺骨』は更にスケールが大きくなっている。

ダ・ヴィンチの真作か贋作か

今回登場してくるのはルーヴル美術館の地下収蔵庫で見つかった素描。ダ・ヴィンチが晩年に描いた『大洪水』の連作の一枚のように見えるもの。封筒に納まっていたものを清掃員が見つけたという。果たしてこの作品は真作なのか贋作なのか…。これは大きな問題だ。

館長のルイーザから極秘裏に調

査の依頼を受けたスギモトと晴香は、ダ・ヴィンチの生涯を細部に渡って調べ、判定の証拠となるものを捜していく。ダ・ヴィンチ研究の第一人者アンドレア先生のもとを訪ねると、資料を誰かに盗まれた直後で、そちらの調査まで頼まれてしまう。後に残されていた「暗号」のように見える手掛かりは…。

指紋や血痕から得られるものは…

素描には僅かながら指紋の跡があったり、血痕のような染みが見つかったりした。現代の科学なら、新しい証拠を見つけ出すことができるのか。ダ・ヴィンチは十六世紀に生きた人。500年前の痕跡を捜していくことになる。

ダ・ヴィンチはメモのようなものや素描を数多く残している。でも絵画の方は本当に限られている。本書に登場してくるのは『荒野の聖ヒエロニムス』と『最後の晩餐』、『モナリザ』など。ところどころにダ・ヴィンチの時代の描写が挿みこまれていて、当時のイタリア、フランスなどの情勢について解説してくれ

一色さゆい・作品リスト

1. 神の値段
2. 嘘をつく器 死の窯変天目
3. 絵に隠された記憶
4. ピカソになれない私たち
5. コンサバター☆
大英博物館の天才修復士
6. 幻の《ひまわり》は誰のもの☆
7. 飛石を渡れば
8. 光をえがく人
9. 失われた安土桃山の秘宝☆
10. ジャポニズム謎調査
11. カンヴァスの恋人たち
12. ユリイカの宝箱
13. ルーヴル美術館の天才修復士☆
14. ダ・ヴィンチの遺骨☆
☆がコンサバター・シリーズ

るのは有難い。

美術品に関わる登場人物の思惑が随所に隠されていることになり、それがスギモト、晴香の動きによって少しずつ浮かび上がってくる。

美術ミステリとしての仕上がり

このコンサバター・シリーズは美術ミステリとして良く出来ている。これぐらいしっかりした構成で書いてくれると安心して読める。下に深水黎一郎作品も取り上げてみたが、高レベルの美術ミステリを読みたい。原田マハ作品もまた少ししか読んでいないので、今後楽しみに読んでいきたい。

深水黎一郎「名画小説」

2021年に河出書房新社から出た本。名画を題材にしたショートショート集のようなもの。13編収録。美術に興味があって、名画の予備知識があるとより楽しめると思う。本書の中にも題材の作品が写真で載っているけれども、白黒印刷なので…。

第一話の『後宮寵姫』はドミニク・アングルの『グランド・オダリスク』がテーマ。この絵が美術論争の中でどのように取り上げられているかと言うと…。現在はルーヴル美術館にある。足首を捻挫していた主人公がゆっくりこの作品を見学していると急に横からぶつかられて転倒してしまった。ぶつかってきた娘はずばやく財布を盗み取ると逃げの態勢に入った。その時動けない主人公に手渡されたものは…。「そんなことありえないだろう」と思いながらも、思わずニヤリとする話。比較的くだけた発想の展開が多いのも楽しめる要素。日本人の絵画作品は私が初めて見るものもあった。第十二話『祖母緑の少女』に登場するアルブレヒト・デューラーの『四人の使徒』は有名作品。それに付け加えた話も飛び切り奇想天外なもの。「ああ、そういうことなのかあ」と納得する。ショートショートだから成り立つ流れなのだろうと思う。

深水黎一郎は美術に関連したミステリをよく書いていて、興味深く読める作家の一人だ。